

## 歴史・文化・産業都市の開城

金 貴 東

## ●開城行政地図の変遷

朝鮮民主主義人民共和国（以下、「朝鮮」）の最南端の都市開城は、高麗の王都をはじめ、古くから政治・軍事の要衝地、商業活動の中心地として栄えた。

この地域は三国時代、高句麗と百済の接境地であったため、軍事作戦上の城や施設があり、これを境に「冬比忽」、「扶蘇岬」（「開城」と「松嶽」の意味）の二つの地域に分けられた。「開城」としたのは、後期新羅の時代からである。初の統一国家高麗（九一八～一三九二年）は、風水地理においても明堂（古代中国の王が政務を行う宮殿。風水地理で理想的な地を意味する）の場所である「開城」と「松嶽」を統合し、「開州」と改称した。以後、「開京」、「皇都」、「京都」等と呼ばれ、高麗滅亡の一三九二年まで王都として君臨した。二〇一三年六月、開

城市の歴史遺跡群が世界文化遺産として正式に登録された。平壤近郊にある「高句麗壁画古墳群」（二〇〇四年）に次ぎ二件目となる。統一国家の始祖・王建、三代・恭愍王等の墳墓と高麗歴代の王墓、王宮基壇跡の満月台、開城城とその南門・南大門、天文象観測機関・開城瞻星台、世界最古の大学といわれる成均館等、一二カ所が登録された。

開城市は、朝鮮半島中部、朝鮮西海岸地域にあり、北緯三八度線上に位置する。平壤までの距離は、鉄道で約一八七キロ、高速道路は約一八五キロで結ばれている。ソウルまでは鉄道で約八七キロの距離、軍事分界線のある板門店までは八キロ、開城工業団地（以下、開城工団）からは、わずか二・五キロと近接する。位置的に「軍事分界線都市」ともいえる。東部は長豊郡、北部は黄海北道金川郡、

西部と南部は開豊郡に、南東部は軍事分界線を挟み京畿道坡州市と接する。開城市中心部（二七洞とサムゴリ、朴淵里を含む）の面積は一七九・二六三キロ平方メートル、開城市全体では東京都八王子市（約一八六キロ平方メートル）ぐらいの大きさになる。人口は三〇万八四四〇人（一九〇八年センサス、開豊郡含む）、都市部は一九万二五七八人となっている。

一九四五年解放当時、北緯三八度線を境に南半部に属し、朝鮮戦争後、北半部の「朝鮮」に含まれることになった。開城市は二〇〇三年まで一市、三郡（板門、開豊、長豊）で構成されていたが、二〇〇二年に開城工団設置に関する「政令」により、大きな統廃合が行われた。開城工団地区は開城中心部の子男洞・善竹洞・東興洞等の一一の洞と高麗洞、恩徳洞、内城洞等の一二の洞の一部地域を、

板門郡板門邑と三峯里、田齊里の各一部地域をその範囲とした。

また、板門郡を廃止、板門邑を鳳東里に改称し、板門郡の進鳳里、平和里、東倉里、板門店里等の四つの里と田齋里、三峯里のそれぞれ一部を開城市および開城工業地区に吸収した。さらに、開豊郡の解線里の一部地域を開城市松嶽洞へ吸収し、開豊と長豊郡を開城市から分離し、黄海北道直属とした。「開城工業地区法」は観光地区の開発も網羅しているため、解線里の一部地域の吸収は前述の王建、恭愍王陵等が位置するのと関連する。現在、開城市は一市・二七洞・七里である（参考文献①、②）。

## ●花崗岩の美しい山々が聳える

開城市は比較的温暖な気候条件に恵まれている。冬は短くそれほど寒くはないが、夏は長く蒸暑い。年平均気温一〇・一度、一月平均気温はマイナス五・四度と北部两江道より一三度も高い。八月は二四・四度で一番暑く、湿度は月平均八八％と蒸暑い。年間降水量は一三二・九ミリと（朝鮮全体一〇〇〇～一二〇〇ミリ）「朝鮮」でも多雨地域にあたる。夏は降水量全体の六三％と多いが、春は少ない

(春・冬季で一六%)。近年、異常気象による集中豪雨(三時間当の降水量五〇ミリ以上)の被害も少なくない。二〇一一年七月、三九七ミリの豪雨被害(『朝鮮中央通信』二〇一一年七月二八日)があり、翌年の八月には豪雨で六六〇名が住居を失った(全半壊二四〇余棟、農耕地浸水二二〇〇町歩、『朝鮮中央通信』二〇一二年八月一八日)。集中豪雨による対策が急務である。

河川は主に礼成江(一八七・四キロ)と臨津江(二七二・四キロ)の支流が流れる。臨津江の第一支流、沙彌川(六二・四キロ)と沙川江(三七・五キロ)が、礼成江の支流は、市内北部の朴淵里に吾助川(三二キロ)が分布する。独立した河川は、市内南部にある錦城川(一八・五キロ)が西海に流れ出る。開城市の中心的河川となる沙川江の支流には、板門川(板門店里)と市中心部(銅峴洞・歩仙洞)を流れる池波里川、長豊郡境界の華蔵山を源流とし、龍興洞、東倉里を経由する東大門ケウルがある。砂が多いことで砂川ともいい、水よりも砂が自慢だ。古くから神経痛、関節炎等の治療に効果があり、砂風呂治療場とし

て知られている。また、砂質は建材にも優れ、韓国のCSグローバル社が開城貿易総会社と三〇年間の契約(二〇〇四年)を結び、軍事分界線を越えた陸路輸送も実現した(『統一部国政ブリーフィング』二〇〇四年六月七日)。現在は中断している。開城市を流れる河川は夏には水量が増すが、春と冬は減少し、干上がる場合もある。一九四五年現在、三つの貯水池しかなかったが、一九五〇〜六〇年代に造成が盛んに行われ、現在、龍興洞にある松都貯水池と鳳東里南部の東倉貯水池、中部に徳水貯水池等があり、開豊と長豊郡も含め、二〇カ所が造成された。

朝鮮自然地理区の西南低地帯、地形区では西海低地帯・江華湾沿岸低地の北部に属する。山地の割合は多いが、平均海拔高度(一一六メートル)は、朝鮮半島平均(三三四メートル)より低い。開城市の大幹を成す阿虎飛霊山脈(総延長約二〇〇キロ)が、北東から南西にかけて聳え立ち、北から南に行くにつれ緩やかな丘陵地形となる。開城地域でこの山脈の主峰を成すのは北部の朴淵里東部の墓地山(七七八メートル)、秀龍山(七一六メートル)、松岳山

(四九〇メートル)、天磨山(七五七メートル)で、比較的平坦地に連なることにより、その方向、山勢が明確であり、切立った奇岩絶壁の山々の風景は絶景である。墓地山から南の華蔵山(五五九メートル)、大徳山(二三六メートル)が臨津江支流である沙彌川(六一・四キロ)の分水嶺を成し、長豊郡との境界線となっている。北西部は豆石山(四一五メートル)が金川郡と、南西部の開豊郡とは氷庫山(三一八メートル)、松嶽山(四九〇メートル)、進鳳山(三一〇メートル)が連なる。

開城市は北部の松岳山、南に龍首山(一七八メートル)、西にチネ山(二〇三メートル)等の稜線に覆われた、開城盆地(花崗岩浸食盆地)が形成されている。高温多湿の気候条件が風化を促し、約五〜一〇メートルには真砂土層が存在する。主な基盤は、始生代の片麻岩、結晶片麻岩であり、礼成江と臨津江断裂帯によって破壊され、これに沿って中生代花崗岩が突き出し、険しい山々が誕生した。以後、浸食・削剥作用を繰り返し、現在の起伏と美しい絶景の残丘性山地、奇岩絶壁が作られた。中生代の激しい地殻運動で地帯構造が

複雑になり、多くの有用鉱物が形成された。金・鉛・亜鉛・銅やレアメタルのタングステン・モリブデン等の金属資源をはじめ、螢石・重晶石・藍晶石・石灰石・花崗石・真砂土・超無煙炭・高陵土等の多様な地下資源が分布する。

●「開城・松都商人」の伝統的商業都市

高麗から朝鮮時代まで高麗人参の栽培、紅参等を製造し、国内商業、国際交易を担当した商人を「開城商人」ともしくは「松都商人」と呼んだ。その商業活動は、府内での常設店舗「市塵(店)」、全国的な「行商」、海上貿易の「船商」といわれ、中国や日本を繋げる国際貿易で活躍した。その呼び名は、今日、商人精神の典型、商人の象徴となっている。「開城商人」を創出した背景に国際貿易港の存在がある。高麗の都邑地開城は古くから高麗磁器をはじめ、匠工人が絹、麻織物、高麗紙、高麗墨といった文房具などの手工業品等を生産し、宋、日本、東南アジア、西アジアに至る広範囲の対外貿易が活発に行われていた。礼成江入口の碧瀾渡(現在の開豊郡新西里)が、国際貿易港の拠点と

してその機能を發揮した。麻、筵、扇子、高麗人參等を輸出し、絹、寶石、お茶、薬剂、楽器等の輸入が宋との主な貿易品であった。契丹、女真とは農機具を売り、馬を買い、西アジアからは水銀や香料を輸入したという。商店街が多く連なり雨が降っても屋根の下を通れば濡れずに市内に入ることができ、一世紀末の開城には一〇万户、五〇余万の住民が暮らしていたという(参考文献③)。

現在、開城市の工業は、紡織・編織および被服、日用品、食糧、人参加工と機械製作および建材工業で構成されている。開城市紡織洞に位置する開城紡織工場(一九五二年発足)をはじめ裁縫絲工場、タオル工場、毛布生産協同組合等の工場が稼働している。なかでも紡織工場は紡織・織布・染色にいたる全ての生産工程を備え、格子布をはじめとする六〇余種の布を生産し、輸出も行っている。工場傘下には工業専門学校、技能工学校、託児所、幼稚園、診療所等も運営している。編織・被服部門では主に、開城被服工場をはじめ、九月一四日被服工場、子男山輸出被服工場で既製服、女性・子ども・学生服等を生産する。平壤、

咸興、新義州で産出する綿糸、ピナロン、テルロンを主な原料としている。

食料工業生産は、軽工業生産額二〇%以上、工業生産額一五%以上を占める。醬油類、油類、肉や果物および野菜の加工品、酒や清涼飲料水等を生産する。開城綜合食料工場(龍興洞)がその主軸で、特に独特な風味とコクのある開城コチジャンは観光客にも人気だ。高麗人參と人參酒は地方特産物として重要な位置を占める。開城人参加工工場、高麗人參酒工場、高麗薬加工工場で生産する。また、鳳東里(旧板門邑)にある板門人参加工工場でも近隣農場で栽培した高麗人參で党參、蜜參、瓊玉膏、人參精等の薬品加工品を生産する。

開城市一帯を覆う花崗岩を利用した建材工業も盛んである。「朝鮮」においても重要な花崗石生産地として、花崗石の研磨製品、舗石や敷石、大理石等を生産する。

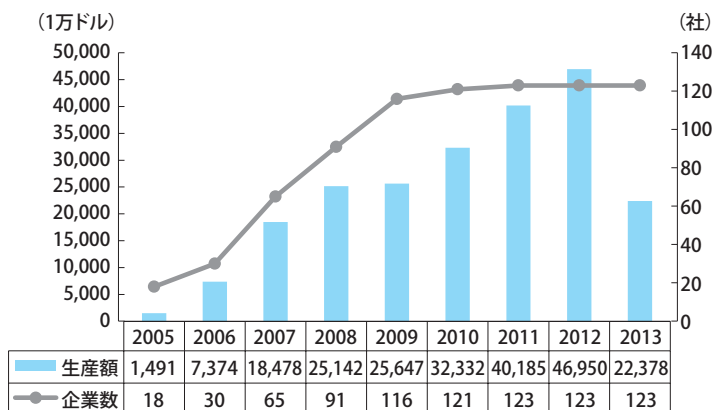
二〇〇六年、韓国のアリランテリム社と開城総会社との合意により、花崗石の事業契約(投資額二五六万ドル)を結び、工場を設立した。開城の花崗石は、中国のそれより価格が低く品質も高いという。「開城工業地区法」の適用外

で運営し、騒音のため開城公団とは二キロ離れた場所に配置した(『連合ニュース』二〇〇六年九月二七日)。韓国統一部の統計によると、二〇〇七年一月、四三七トンを搬入、翌月には約三倍近く増加し、〇八年三月まで三五〇トンを以上、七万ドルとなっている。残念なことに天安艦沈没を受けた対北制裁である「五・二四措置」により現在中断状態にある。

### ●民族経済の実験場「開城工業団地」

開城工団は、二〇〇〇年八月に南北間で合意し、開城市一帯に八〇〇万坪規模の工団と一二〇〇万坪規模の背後団地を造成する、南北双生・民族経済共同体の統一プロジェクトである。二〇〇二年、「開城工業地区法」により開城工団の商業的地位をはじめ工団地区の位置付けがなされ、二〇〇四年には、開城工団初の製品「統一ナンビ(鍋)」がソウル市街のロッテ百貨店で販売された。当時、鍋は一六・一八リットルを一〇〇〇点搬入し、一万九八〇〇ウォンで販売(韓国では通常の半額水準)された。二〇一四年、開城工団共同衣類ブランド「シスプロ」は、

図1 開城公団生産額・企業数現況

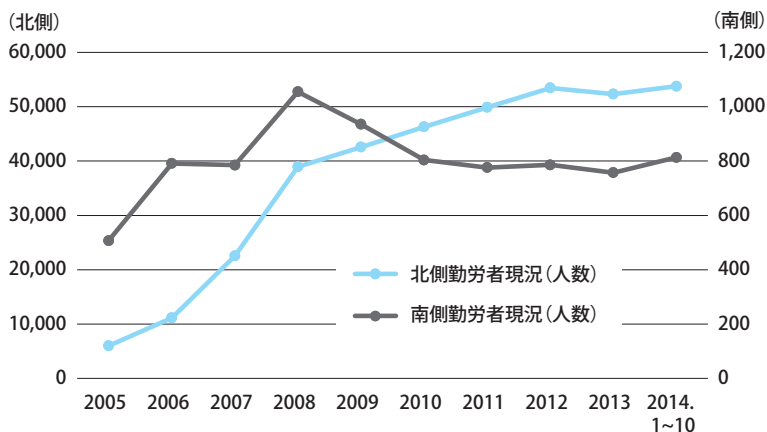


(出所) 開城工業団地管理委員会。

韓国のテレビショッピングで下着販売をしたところ、初日で完売に成功し、一億五〇〇万ウォンを売り上げた。(『毎日経済新聞』二〇一四年一月一七日) また、二〇一五年一月、韓国商社は、開城工団衣類製品等の直営店(昌原市馬山合浦口)を開いた。主な商品は、スポーツシューズ、登山服、男女下着類等で、品質の良さが常連客を増やしている。その理由を質の高い北の熟練工だと関係者はいう(『慶南道民日報』二〇一五年一月二六日)。



図2 開城公団勤労者現況



(出所) 図1と同じ。

現在、繊維、紙木材、食品、電気電子をはじめとする一二五の事業体が稼働しており、従業者数万四一七四名、年間生産額四〇〇万ドルの輸出工団へと成長している(図1、図2)。開城工団関連取引額は二〇一二年一九億ドル、南北間総取引と比較すると、二〇〇五年一六・七%から二〇一二年九九・六%を占めている。開城工団は過去一〇年間、南北共生・民族経済共同体のモデルとしての役

割を果たしたのだろうか。この間得た経済効果は、南北それぞれで三二・六億ドル、三・八億ドルになり、計画の三段階まで完工されれば、六八六・七億ドルの効果が期待されている(参考文献④)。物流ハブ空港の仁川国際空港までは直線で約五〇キロ、前述した他の周辺都市までの距離も非常に近接した立地条件である。京義線鉄道を利用した、中国・シベリア横断鉄道での物流構想もある。韓国電力公社によって、汝山変電所(電力は西仁川複合発電所から供給)から一六キロの送電線路をへて、平和変電所に送電方式一五四キロボルト、一〇万キロワット(韓国の一般家庭、三万五〇〇〇戸の一日利用量に相当)が電力供給されている。その他、汝山電話局を経由した開城電話局、排水処理施設(三万トン/日)、廃棄物処理場(焼却一二トン/日)、消防署、応急処置施設等が整備されている。注目すべきは、工場および生活水の供給である。開城工団から一七キロ離れた北部の長豊郡に位置する、月古貯水池(一八〇〇万トン規模)から浄排水施設(六万トン/日規模)に供給している。以前は、飲料水としても良

質な地下水を利用していた。『韓国水道新聞ウォーターライフ』二号、二〇〇七年一月二五日)。開城工団の水は、開城水道事業所(K-water)の管轄で、七名の韓国側技術管理者と「朝鮮」の警備担当者、二九名で運営されている。水は、開城工団(四万五〇〇〇トン)だけでなく、開城中心地七万人の生活水も供給(一万五〇〇〇トン)しているのが特徴的である。水道事業は二四時間体制で臨むので、南と北の作業員はほとんど毎日を共にする。一時稼働中断時(二〇一三年四〜九月)、関係者が撤退したなか、水道関係者は留まることになった。その間、南北間に「根強い価値観」や生活様式の差を理解しながら、昨今、家族のように接し、仕事をしているという(K-water webmagazine)二〇一五年七月号)。

による不安要因、労働者不足等の問題点がある。なかでも政治・軍事的な要因によるところが非常に大きな比重を占め、「政経分離」の声も上がっている。当然ではあるが、南北双方は政治・軍事的、制度的制約は勿論、それぞれ物作りの観点や思考、生活様式も異なる。しかし、多様な製品を産出してきた一〇年間、双方の多様な接近方法を学んだはずである。工団は「五・二四措置」から除外し、正常運営していること、開城市民の為の水の供給等は、「モデル」としての位置の高まりと考えられる。今後、新しい「モデル」の構築に期待したい。(きむ くいとん/朝鮮大学校准教授)《参考文献》

①「朝鮮民主主義人民共和国開城工業地区法規集」法律出版社、二〇〇五年。  
 ②朝鮮科学辞典出版社、韓国平和問題研究所共著「朝鮮郷土大百科第二巻」二〇〇四年。  
 ③崔南善著、景仁文化社編集部編「中京誌」景仁文化社、一九八九年四月。  
 ④現代経済研究院「開城工団稼働一〇年評価と発展展望」二〇一四年一月二日。